

機関番号：22604

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2008年～2010年

課題番号：20520392

研究課題名（和文） 『国語』の版本と校勘学の研究

研究課題名（英文）

A Study of Several Prints of Guoyu and the Methods of Textual Criticism

研究代表者 小方 伴子 (OGATA TOMOKO)

首都大学東京・人文科学研究科・助教

研究者番号：10347255

研究成果の概要（和文）：

本研究では、段玉裁によって『国語』の版本に書き入れられた題跋、校勘記、校語などが、『国語札記』及び『説文解字注』にどのように利用されているかを、その版本すなわち校本（題跋、校勘記、校語などが書き入れられている版本）の原本調査の結果をもとに明らかにした。

研究成果の概要（英文）：

In this study, I showed how *Duan Yucai* (段玉裁) had used the notes that written on *Guoyu* (国語) for his own books—*Shuowenjiezi zhu* (説文解字注) and so on.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・中国語学

キーワード：『国語』、『説文解字注』、『説文解字読』、校本、版本、校勘、段玉裁、顧千里

## 1. 研究開始当初の背景

『国語』の伝承、校勘、注釈に関する研究は、国外においては李慶『顧千里研究』(1989)などに数頁程度記載されているが専著はみられない。国内では、大野峻「国語公序本の再評価」(1974)及び同氏が『新釈漢文大系・国語』の「解題」として記した一連の論述がある。しかし『国語』の校本（書き入れ本＝題跋、校勘記、校語が書き入れられている版本）を利用した研究は、国外国内を通じて研究代表者の「宋明道二年刊本『国語』の黄丕烈重刻について」(2008)以前にはみられない。報告者は、当該論文を出発点とし、校本を利用した『国語』の研究を試みた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、清朝の校勘学者や蔵書家によって『国語』の版本に書き入れられた題

跋、校勘記、校語などが、清朝人の『国語』の札記や注釈、及びその他の著作にどう利用されているかを、校本の原本調査の結果から導き出すことにある。清朝人の『国語』の校本には、陸救先校本、惠棟校本、盧文弨校本、段玉裁校本、黄丕烈校本、顧千里校本などがある。本研究ではそれらの中からおもに段玉裁校本を取り上げる。段玉裁の『国語』校本は、現時点では所在不明である。臨本が二種類（顧之遠校本、顧千里校本）存在しているが、そのひとつである顧之遠校本については、先行研究の記述に矛盾がみられる。本研究ではまずその二種類の臨本の由来と書き入れの詳細を、原本調査を踏まえて可能な限り明らかにする。次に臨本に書き入れられている段玉裁の跋文、校勘記、校語などを詳察し、それらが乾隆嘉慶年間の『国語』の注釈や札記、或いはその他の著作にどのように取り入

れられているかを検討する。これまでの『国語』の研究には、段玉裁校本の書き入りを網羅的に調査し、利用したものはみられない。本研究の試みは、『国語』の研究にとっても、段玉裁研究にとっても意義のあるものであると考える。

### 3. 研究の方法

本研究では、『国語』の校本に書き入れられた題跋、校勘記、校語などが、清朝人の『国語』の札記や注釈、及びその他の著作にどのように利用されているかを、校本の原本調査の結果をもとに論じた。研究に利用したおもな版本（校本）は下記の通りである。

(1) 国語二十一卷 吳韋昭注 明嘉靖七年金李澤遠堂刻本 顧之達校並臨段玉裁校跋 八冊（中国国家図書館所蔵）

(2) 国語二十一卷 吳韋昭注 明新建李克家校刊本 顧廣圻朱墨合校並跋 二冊（台湾故宮博物院所蔵）

### 4. 研究成果

(1) 『国語札記』における段玉裁校語について

黄丕烈・顧千里編集の『校刊明道本韋氏解国語札記』（以下、『国語札記』と称す）には、「段云」として引かれる段玉裁校語が八十二箇条みられる。本研究では、その段玉裁校語の詳細、すなわちいつ、誰の手によって、何にもとづいて書かれたものであるのかを論じた。

「段云」ではじまる段玉裁校語は、大きく二種類に分類される。ひとつは『国語札記』のおもな編者である顧千里が、自身の校本に写し取った段玉裁校本の書き入りを引用したものである。もうひとつは、顧千里が書いた『国語札記』の草稿に、段玉裁自身が手を加えたものである。前者のもとになっている書き入れは、乾隆三十四年（1769）、段玉裁が戴震の校本を用いて行った校勘の記録であり、後者は重刻明道二年本が刊行される前年、嘉慶四年（1799）の作である。

執筆の段階において、顧千里は段玉裁のもとを訪ねて教えを乞うている。『国語札記』は確固とした編集方針にもとづいて書かれたものであるが、顧千里は段玉裁が字句の異同について見解を述べているものについては、その編集方針を崩してでも採用している。段玉裁は顧千里の書いた草稿に、自身がこだわりをもっている学説を自由に書き加えている。

(2) 『国語』段玉裁校本とその臨本

段玉裁校本の臨本のひとつである顧之達校本（中国国家図書館所蔵、『北京図書館古

籍善本書目四卷』No.7395）については不明な点が多く、先人の記述や先行研究の中にはそれを段玉裁校本そのものであるとみなしているものもある。報告者はまずこの顧之達校本の詳細を知るべく、題跋、印、書き入れなどの調査を行った。

顧之達校本は、「乾隆五十八年（1793）三月に蘇州近辺の校勘学者或いは藏書家（顧之達である確証はない）が、段玉裁校本から直接写し取ったものである」ということが、版本の書き入れ及び当時の様々な記述から推察される。この校本は、底本が段玉裁校本と同じ金李本であり、段玉裁の書き入れが、位置も含めて忠実に写し取られている可能性が高い。真本の代わりとして用うるに足る価値がある。

報告者はまた、段玉裁校本のもうひとつの臨本である顧千里校本についても、同様の調査を行った。

顧千里校本は、「乾隆五十八年（1793）五月に顧千里が段玉裁に校本を借りて書き入れを写した」ということが跋文より明らかであり、その素性は顧之達校本より確かである。ただし段玉裁校本の代用とするには難点もある。まず挙げられるのは、その底本が公序本の中でも特殊な構成をもつ張一鯤本系統の版本だということである。段玉裁校本の底本である金李本とは文字の異同も少なくない。顧千里校本にとっては、段玉裁校本の底本である金李本そのものも、校勘作業の資料となりうるものだったのである。実際に顧千里は、段玉裁校本を用いて自身の版本に校勘を施すときに、校本に記された校語や校勘作業の成果だけでなく、その底本である金李本との異同も書き入れている。また跋文の「懋堂先生校語録上方爲別」という記述からわかるように、校語を写し取るときに、もとの配置に手を加えている。

顧之達校本と顧千里校本には、それぞれ異なる利点と難点とがある。臨本としての限界もある。しかしそれを踏まえた上で両者の利点を活かし難点を補い合いながら用いるのであれば、真本の代わりとして十分に役立つものである。

(3) 段玉裁『説文解字注』における『国語』の引用テキスト

段玉裁の『説文解字注』には『国語』の引用が三百十三箇条みられる。段玉裁が『説文解字注』或いは『説文解字注』に『国語』を引用するに当たって、どのようなテキストに依拠し、それにどのような改正を加えたのかを正確に知ることは、『説文解字注』研究及び『国語』研究の両方にとって意義がある。すなわち『国語』を媒介として『説文解字注』の引用文献に対する段玉裁の文字改正の一端を示すことであり、一方、まとまった作と

しては残されていない段玉裁の『国語』校勘記の一部を示すことにもなる。

本稿では、『説文解字注』における『国語』の引用を分析するに先立ち、『説文解字読』及び『説文解字注』における『国語』の引用テキストを特定し、その詳細及び利用方法を述べた。

『説文解字読』における『国語』の引用テキストは段玉裁校本である。『説文解字注』における『国語』の引用テキストも、基本的には段玉裁校本である。従って字句の検討には段玉裁校本を参照する必要がある。ただし『説文解字読』とは異なり、執筆の際に段玉裁は重刻明道二年本も参照している。『説文解字注』における『国語』の引用について論じる場合は、その点も考慮されなければならない。

今我々が、『説文解字読』或いは『説文解字注』に引かれている『国語』の字句の異同について論じようとするれば、引用テキストである段玉裁校本の書き入れを参照することが不可欠となってくる。しかし段玉裁校本は既に逸している。『説文解字注』における『国語』の引用を、可能な限り段玉裁の執筆環境に即して論じるために、筆者が考える最善の方法は以下の通りである。

『国語』段玉裁校本の底本の代替には、四部叢刊所収の重刻公序本（底本は段玉裁校本と同じ金李本）を用いる。段玉裁校本に書き入れられた明道本との校勘記の代替には、顧千里校本の書き入れ（顧千里が段玉裁校本から写し取ったもの）をおもに用い、顧之達校本を補足資料として利用する。

本研究では関連資料として、以下(4)(5)(6)の三点を作成した。これらの資料は、上記(1)(2)(3)の学術論文と合わせて、『『国語』の版本と校勘学の研究 平成20-22年度科学研究費補助金（基盤研究（C）研究成果報告書）』として200部印刷し、関連分野の研究者及び機関に配布した。

#### (4) 『国語札記』における段玉裁校語一覧

重刻明道二年本『国語』と合刻刊行された『校刊明道本韋氏解国語札記』の記載から、「段云」で始まる段玉裁校語を含む項目を抜き出し、一覧にまとめた。段玉裁校本の臨本（顧千里校本）にはほぼ同様の記載のあるものについてはその旨の記述を加えた。

#### (5) 段玉裁校本の校語一覧

段玉裁校本には二種類の臨本（顧千里校本、顧之達校本）がある。本研究では、その二種類の臨本に共通して書き入れられている段玉裁の校語七十七箇条を、段玉裁校本から写し取ったものであるとみなし、一覧にまとめた。

#### (6) 『説文解字読』における『国語』の引用一覧

『説文解字読』には『国語』の引用が七十二箇条みられる。七十二箇条のうち五十四箇条は、その一部或いは全部が『説文解字注』にも引かれている。本研究では、『説文解字読』における『国語』の引用、それに対応する『説文解字注』の引用、『国語』明道本の原文、同じく公序本の原文、段玉裁校本の校勘記を一覧にまとめた。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 小方伴子、「段玉裁『説文解字注』における『国語』の引用テキスト」、『人文学報』、査読有、2011年、No. 448、pp. 1-25。
- ② 小方伴子、「『国語』段玉裁校本とその臨本」、『人文学報』、査読有、No. 433、2010年、pp. 1-28。
- ③ 小方伴子、「『国語札記』における段玉裁校語について」、『人文学報』、査読有、No. 418、2009年、pp. 19-48。

〔学会発表〕（計1件）

- ① 小方伴子、「段玉裁『説文解字注』における『国語』の引用テキストについて」、日本中国学会第六十二回大会、2010年10月10日、広島大学。

〔図書〕（計1件）

- ① 小方伴子、『『国語』の版本と校勘学の研究』、科学研究費補助金・研究成果報告書、2011年、78頁。

〔その他〕（計3件）

- ① 小方伴子、『『国語札記』における段玉裁校語一覧』、科学研究費補助金・研究成果報告書、2011年。
- ② 小方伴子、「段玉裁校本の校語一覧」、『科学研究費補助金・研究成果報告書』、2011年。
- ③ 小方伴子、『『説文解字読』における『国語』の引用一覧』、『科学研究費補助金・研究成果報告書』2011年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小方 伴子 (OGATA TOMOKO)

首都大学東京・人文科学研究科・助教

研究者番号：10347255